

# AI? AI? AI? AI? AI?

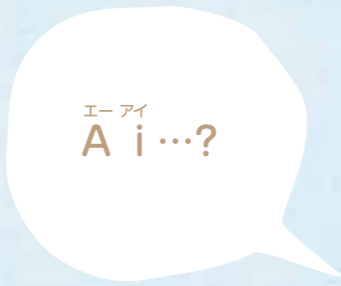
放射線科は画像診断部と放射線治療部に分かれています。今回は画像診断部の番です。画像診断部の主な仕事は「画像診断」と「IVR」(アイヴィーアール)です。私の相棒の小島医師はIVR専門医を取得しています。IVRは「interventional radio logy」のことですが「カテーテルによる血管内治療」というとわかりやすいでしょうか。今回は彼に「IVRのことを書いてくれないか」と水を向けると「講演の用意があるので無理です」とすげない返事。私が担当になりました。いきおい画像診断の話になるのですが、総合病院では画像診断を含めて最終診断は各臓器専門医に委ねられることが多いですね。放射線科医がたとえば脳の画像診断のことを話そうとしても、やはりそれは脳神経外科医とか神経内科医のほうに分があるというか、遠慮して

しまい、放射線科医にとってはつらいところがあるわけです(笑)。では放射線科医には何が残るんだろう。医療被曝のことも話そうかしら。しかし意外に思われるかもしれないですが、被曝というのは科学的に確立されていない所が多いのです。また被曝という言葉にはマイナスのイメージが付きまといますが、CTでは癌を診断し、放射線治療では癌細胞を死滅させます。つまり検査や治療

で被曝をしても、最終的には患者さんにとって不利益を上回る利益を提示することが放射線医療です。このように医療被曝のなしは一見矛盾した内容を含みますので、一筋縄ではいきません。そんなこんなで被曝に関してはまたの機会にして、今回選んだのは「Ai」(エーアイ)です。

## Q エーアイって何ですか?

AIとよく普通はArtificial Intelligence「人工知能」のことです。AIの進歩で画像診断の仕事がなくなるんじゃないかという噂さえありますが、私は逆に治療の必要のない異常がコンピューターにいっぱい指摘されて仕事が増えるんじゃないかと心配しています。しかし今日の本題は「小文字のAi(Autopsy imaging)」



オートプシー・イメージングです。放射線科医の活躍するテレビドラマもある位なのでご存じのかたがおられるかもしれません。一般的に死後のCTによる全身撮影をAiといっています。Autopsyとは解剖のことです。日本の古い言葉には「腑分け」という言葉があります。吉村昭の「冬の鷹」には杉田玄白・前野良沢らがオランダの解剖書と刑死した罪人の腑分けを見比べながら「いささかも違いませぬな」とその解剖書の正確さに驚愕・感嘆する様子が描かれ、日本の西洋医学の門出が実感できる名作ですが、Aiを直訳すると「腑分け」「解剖」の画像診断となります。でも現行の日本語訳は「死亡時画像診断」が使用されています。実はAiは和製英語なのです。欧米でも通じるようですが、向こうではpostmortem imagingが一般的で、これは状況そのままの表現で「死後画像診断」です。

った場合、医師は正確な死因を調べるためにご家族が一番つらい時に病理解剖を依頼することがあります。病理解剖は、正確な死因の医学的統計を提供し、医師の診断能力を向上させ、最終的には皆さんへの福祉となつて還元されます。しかし亡くなった患者さんに直接の利益はありません。さらに親族にとつては肉親のからだにメスを入れるという心の痛みが手伝って、ご了承が得られないことが少なくありません。その上日本では現在病理解剖医数と病理解剖数の減少が問題になっています。解剖が行われない現在の状況は「死因不明社会」と言われ、将来の医療の質の低下が懸念されています。そこで注目されているのがAiなのです。コンピューターの進歩とともにCTやMRIの性能も飛躍的に向上し、特にCTでは全身を正確に画像化できるようになりました。ご遺体になんかの傷も残しませんので受け入れられやすいでしょう。しかしAiは病理解剖と同等の情報は得られません。もできません。くも膜下出血や大動脈瘤破裂など、CTで十分に診断で

きる疾患がありますが、正確な診断には病理解剖が必要なことはいうまでもありません。現在の日本は、Aiを病理解剖の代用として機能させるをえない社会状況にあるといえるのです。

## Q 病理解剖との関係は?

患者さんが治療の甲斐なく亡くな



岐阜市民病院 放射線科  
**川口真平** 先生

- 専門分野  
胸部画像診断
- 役職  
放射線科部長  
中央放射線部長  
画像診断部長
- 主な資格  
放射線診断専門医  
岐阜大学医学部客員臨床系医学教授  
日本核医学会PET核医学認定医

- 日本内科学会内科総合専門医
- 日本呼吸器学会呼吸器専門医(内科系)
- 日本呼吸器内視鏡学会気管支鏡専門医
- 日本医学放射線学会研修指導者
- 卒業年、主な職歴  
昭和62年防衛医科大学校医学科卒  
防衛医科大学校病院第3内科  
自衛隊中央病院呼吸器科  
岐阜大学医学部附属病院放射線科

## 今月の先生